資料 6

令和６年２月２９日

昭和館開館 25 周年記念　写真展企画　展示構成（案）

昭和館写真展
「失われゆく昭和の仕事
－戦中・戦後の街頭風景－」

会期：令和 6 年 3 月 12 日（火）～6 月 30 日（日）

会場：昭和館　２階ひろば

・令和6年春期写真展
昭和館写真展
「失われゆく昭和の仕事
ー戦中・戦後の街頭風景ー」

・会期
令和6年3月12日（火）～6月30日（日）

・パネル展示
46点（カラー：12点・モノクロ：34点）

・後援（予定）
千代田区　千代田区教育委員会

設営：令和6年3月11日（月・休館日）
撤収：令和6年7月1日（月・休館日）

ごあいさつ

昭和館では、毎年さまざまなテーマで所蔵写真を紹介する写真展を開催しています。今回は「失われゆく昭和の仕事ー戦中・戦後の街頭風景ー」と題して、今では見かけることの少なくなった昭和の仕事を紹介します。

昭和の時代は生活や価値観が大きく変化しました。技術革新の進行や流行の移り変わりも著しく、多種多様な仕事が生まれては衰退し、街頭から消えてゆきました。

当時を知る方にとっては懐かしく、知らない方にとっては新鮮にご覧いただければ幸いです。

S1R0243117134

1. 下駄の歯入れ屋

すり減った下駄の歯を入れ替える行商人。天秤棒で工具や資材をかつぎ、客寄せの太鼓をたたきながら、路地を振り歩いた。

東京都台東区浅草
昭和9年（1934）
師岡宏次撮影

S1H0909001043

2. 路線バスの車掌

東京乗合自動車の女性車掌。三越の白襟の洋服にベレー帽姿の制服から、「白襟嬢」の愛称で親しまれ、女性の社会進出を後押しする役割も果たした。

車掌の主な仕事は、運賃の徴収や安全確認などであった。

東京都台東区上野
昭和9年（1934）7月頃
石川光陽撮影

S1H0909002202

3. かき氷売りの屋台

一般家庭に冷蔵庫や製氷機の無かった時代、夏の暑い時期になると道路わきや空き地では、かき氷やラムネなど冷たいものを売る屋台が見られた。

当時のかき氷は、砂糖をかけた「雪」、砂糖蜜をかけた「みぞれ」、小豆と餡子（あんこ）をのせた「金時」が定番メニューであった。

東京都
昭和11年（1936）6～9月
石川光陽撮影

S1R0243123513

4. 銀座の街を行く人力車

芸者の送迎中と思われる人力車と車夫。明治時代に登場した人力車は、昭和に入ると都市部では見かけることが少なくなった。終戦直後、燃料不足に対応する移動手段として復活したが、次第に観光用としての性格が強くなっていった。

東京都中央区銀座
昭和12年（1937）
師岡宏次撮影

S1H2858106107

5. 上野公園の露店

上野公園へ花見にやって来た人々に、お土産物を売る露店。ひょうたんや小さな和傘が並べられている。

東京都台東区上野
昭和12年（1937）
渡辺豊貞撮影

S1H3043113869

6. 鳩の餌売り

かつて浅草寺では鳩の餌を売る小屋があり、乾燥トウモロコシと豆を混ぜた餌が売られていた。鳩の餌売りは平成15年（2003）に撤去され、餌やりは禁止となった。

東京都台東区浅草
昭和12年（1937）
師岡宏次撮影

S1R0243123343

7. 毒消し売り

「毒消しよござんすかねー」などと売り声を上げながら、行商して歩く越後の毒消し売り。後方のビルは丸ノ内ビルヂング。

薬は越中（富山県）の行商人が有名であるが、越後（新潟県）の毒消し売りは製薬も販売も女性が行い、冬の寒い時期は地元で薬を作り、暖かくなると全国へ行商に出かけた。

東京都千代田区丸の内
昭和12年（1937）頃
師岡宏次撮影

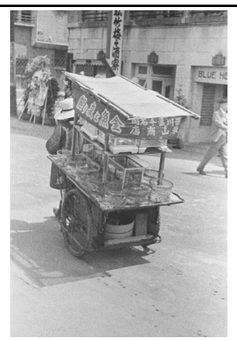
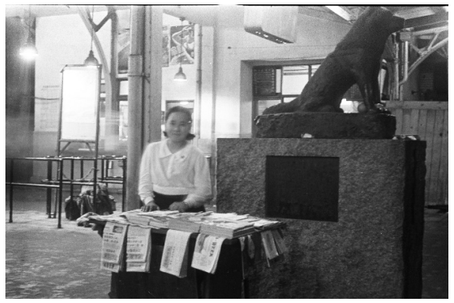
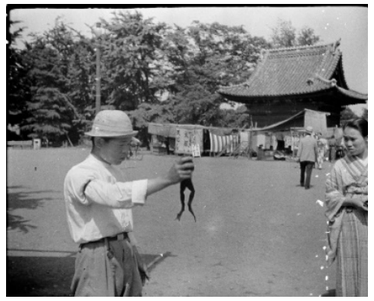
S1R0243117444

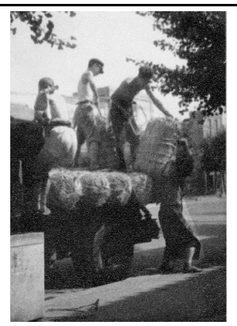
8. 銀座の花売り娘

銀座の街頭で花を売る女性たち。休憩中だろうか。ネオン街の酔客や駅の送迎者を相手に、花束を売り歩く若い女性の姿が見られた。

戦後は家計を助けるため、小・中学生の花売りも多かった。

東京都中央区銀座
昭和13年（1938）
師岡宏次撮影

S1H3043113825	S1R0243123396	S1R0243124516	S1H0808015277	S1H2858106401
9. 玄米パン屋	**10. 金魚売り**	**11. 新聞売り**	**12. 木炭を補給するバス運転士**	**13. ガマの油売り**
				
大太鼓やラッパで客寄せをする玄米パン屋。ロバに荷車を引かせて行商するパン屋もあった。 玄米パンとは、小麦粉に玄米粉を混ぜて蒸しパンのように仕上げたもの。	金魚鉢や水槽に金魚を泳がせ、リヤカーで引き歩く金魚売り。 「きんぎょーえー　きんぎょー」などと売り声を上げる金魚売りは、江戸時代後期の頃から夏の風物詩であった。	渋谷駅ハチ公像の横で新聞を売る女性。当時の新聞スタンドは、若い女性の販売員が多かった。	日中戦争の長期化は、必然的に日常生活を圧迫し、国民は代用品の使用を強いられることとなった。昭和13年(1938)には木炭を不完全燃焼させ、発生したガスを燃料とする「代燃車(だいねんしゃ)」が登場している。車両にガス発生炉を取り付けるだけで、ガソリン車を木炭車へ改造することができた。	浅草寺境内で、カエルを持って客寄せのための口上を披露する男性。ガマの油とは、ガマガエルから分泌される蟾酥(せんそ)を配合したとされる傷薬の軟膏のこと。
東京都港区愛宕	東京都中央区銀座	東京都渋谷区道玄坂	東京都	東京都台東区浅草
昭和13年(1938)	昭和14年(1939)	昭和14年(1939)	昭和16年(1941)6月	昭和16年(1941)6月2日
師岡宏次撮影	師岡宏次撮影	師岡宏次撮影	日本写真家協会(JPS)提供　藤本四八撮影	渡辺豊貞撮影

S1H0808015343	S1H1290017392	S1H2391100113	S1H0909007779	S1H0901015794
14. 手旗を売る露店	**15. 郵便配達をする女学生たち**	**16. 米俵を運ぶ男子学生たち**	**17. 空襲の被災現場で活動する人々**	**18. 殺虫剤を売る露店**
				
シンガポール陥落を祝って、街頭で旭日旗の手旗を売る露店。日本軍の快進撃をたたえ、日本各地で祝賀パレードが行われた。	自転車で配達に出る日本橋高等女学校(現 開智日本橋学園中学・高等学校)の女学生たち。出征などにより男性の配達員が不足していたため、夏休みを返上して日本橋郵便局で郵便や電報の集配に当たった。	トラック荷台から米俵を降ろす勤労動員の男子学生たち。東京写真工業専門学校(現 東京工芸大学)の学生たちで、この日は米俵の荷役などに従事した。	昭和20年1月27日、銀座界隈が空襲をうけ、銀座4丁目交差点にある地下鉄銀座駅への出入口真横に爆弾が落下した。警察官が埋没者の救助に当たり、消防士が建物を消火する様子が写されている。	焼けビルの中で殺虫剤を売る露店。「代用かとり採木」や「ノミトリ粉」の文字が見える。終戦直後、不衛生な環境や外地からの帰国などにより、害虫によって媒介される感染症が大流行した。
東京都	東京都中央区	東京都	東京都中央区銀座	東京都
昭和17年(1942)2月18日	昭和18年(1943)8月頃	昭和19年(1944)9月	昭和20年(1945)1月27日	昭和20年(1945)9月8日
日本写真家協会(JPS)提供　松田正志撮影			石川光陽撮影	米国国立公文書館提供

S1H1591024156

19. 金属類の回収

神保町界隈の空襲の焼け跡を掘り起こし、活版印刷の版面など金属類を回収する人々。金属類のほか、紙屑やぼろなどの廃品を回収し、売却することで生活する人を当時、「拾い屋」や「バタヤ」などと呼んだ。

東京都千代田区

昭和20年(1945)頃

佐藤徳治撮影

S1H3043113801

20. 闇市の屋台

進駐軍から払い下げられた残飯を大鍋で煮込んだ、いわゆる「残飯シチュー」の屋台。「栄養汁」「栄養スープ」などと称して、各地の闇市で売られていた。

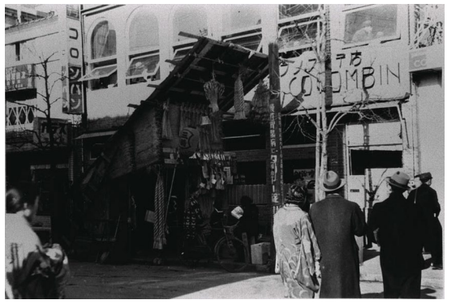
東京都台東区浅草

昭和21年(1946)

師岡宏次撮影

S1H0909002254

21. 正月飾りを売る屋台



12月も20日を過ぎると、街頭に注連飾(しめかざ)りや門松を売る店が並んだ。屋台のうしろは銀座6丁目にあった洋菓子のコロンバン。

終戦直後の物資不足や物価高の最中であったが、家々では玄関先に縁起物を飾って正月を迎えた。

東京都中央区銀座

昭和21年(1946)12月

石川光陽撮影

S1H0701012010

22. 日劇横を走る輪タク

燃料不足のため自動車タクシーの営業が困難な時期、人力の「輪タク」は大都市を中心に人気を博した。

東京では、昭和22年2月1日に露天商の尾津喜之助が「乙な輪タク」をもじって「尾津な輪タク」と称する輪タク営業を開始した。運転手として復員者や引揚者を積極的に採用した。

東京都千代田区有楽町

昭和22年(1947)2月28日

米国国立公文書館提供

S1H2602101875

23. 宝くじ売り

池袋付近の路上で宝くじを売る女性たち。戦後初の宝くじは、昭和20年(1945)10月29日に発売された「政府第1回宝籤」で、1等賞金は10万円であった。

急激なインフレにより、昭和22年の「政府第9回宝籤」では特等賞金100万円に引き上げられた。

東京都豊島区

昭和22年(1947)12月頃

マッカーサー記念館提供

戦後のインフレによる物価上昇

種類	昭和 21 年の値段	昭和 22 年の値段
豆腐（1 丁）	20 銭 (昭和 20 年)	1 円
食パン（1 斤）	1 円 20 銭	6 円 24 銭 (昭和 23 年)
白米（10kg）	19 円 50 銭	149 円 60 銭
コーヒー（1 杯）	5 円 (昭和 20 年)	20 円 (昭和 23 年)
都電乗車賃（大人）	40 銭	2 円
公衆電話（市内 1 通話）	20 銭	50 銭
博物館観覧料（大人/子ども）	50 銭/20 銭	3 円/1 円
朝日新聞（朝刊 1 部）	15 銭	60 銭
週刊朝日（1 冊）	1 円	8 円
宝くじ（政府くじ 1 枚）	10 円	50 円
国家公務員の初任給	540 円	2,300 円

（1 円=100 銭）

【参考文献】
『値段史年表　明治・大正・昭和　週刊朝日編』　朝日新聞社
『朝日新聞社史　資料編』　朝日新聞社

S1H0701011977

24. ピーナッツ売りの学生

学費を稼ぐため、東京の街頭で露店を開き、ピーナッツを売る学生。

卸屋からピーナッツを購入し、三角形に折った新聞紙などに入れて販売していた。

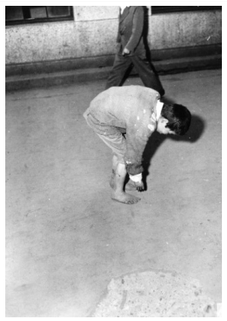
東京都

昭和22年(1947)12月16日

米国国立公文書館提供

S1H0701010337

25. たばこ拾いをする孤児



当時、たばこは極端な品不足が続いていたため、吸殻を拾い集めてたばこ葉を取り出し、巻き直したものを売って日銭を稼ぐことができた。

靴磨き、新聞や切符などの転売、闇市の手伝いなど、孤児たちは生きるために様々な仕事をした。

東京都

昭和23年(1948)6月1日

米国国立公文書館提供

S1R0101115863

26. ふるいの行商人

天秤棒でふるいを売り歩く行商人。当時、様々な日用品を売る行商人が、街頭を振り歩いていた。

写真の行商人は引揚者。現金収入を求めて行商や露天商、日雇い労働に従事する引揚者も多かった。

千葉県千葉市

昭和23年(1948)6月6日

米国国立公文書館提供

S1H0701011109

27. サンドイッチマン

コロムビア・レコードの「湯の町エレジー」のポスターを背にかけ、街頭を歩くサンドイッチマン。近江俊郎が歌い、作詞は野村俊夫、作曲は古賀政男が務めた。

履物の底にも工夫が施され、水で広告の文字が印判される仕掛けとなっている。

東京都

昭和23年(1948)11月17日

米国国立公文書館提供

S1H2840106771

28. 紙芝居屋

紙芝居屋は自転車に紙芝居を積んで街頭を回り、子どもたちを集めて駄菓子を売って紙芝居を上演した。
昭和5年(1930)頃に始まった街頭紙芝居は、戦争とともに姿を消していたが、戦後復活し再び全盛期を迎えた。しかし、テレビが普及するにつれ、次第にその姿を消していった。

東京都

昭和23年(1948)頃

ハワイ大学マノア校図書館日本研究センター提供
ウォルター A. ペニーノ撮影

S1H2941107579

29. ヤマガラおみくじ

ヤマガラを飼い慣らして仕込み、おみくじを引く芸をさせる見世物。
ヤマガラは野鳥の中でも学習能力が高く、つるべ上げや綱渡り、弓を射て扇の的を落とす芸などを見せることもあった。

東京都台東区浅草

昭和21～24年(1946～1949)

フロリダ州立大学提供
オリバー・L・オースティン. Jr.撮影

S1H0702012787

30. プラカードを持って宣伝する人々

「一目千本(ひとめせんぼん) 吉野山」「大阪より片道80円」と書かれたプラカードを待つ男性たち。奈良の吉野山は千本桜で有名で、近畿日本鉄道による花見の宣伝と思われる。

大阪府大阪市北区中之島

昭和24年(1949)3～4月

マッカーサー記念館提供

S1H0702012571

31. ポン菓子屋

ポン菓子とは、米などの穀物を密閉した容器の中で加熱しながら圧力をかけ、一気に圧力を開放することで膨らませた駄菓子の一種。
客が持って来た材料を、専用の機械で加工するのがポン菓子屋の仕事であった。

場所不詳

昭和22～27年(1947～1952)

マッカーサー記念館提供

S1H2840106805

32. チンドン屋

昭和24年3月28日初公開の映画「のど自慢狂時代」を宣伝するチンドン屋。
チンドン屋とは、太鼓など楽器を「チンチン ドンドン チンドンドン」と鳴らすなどして人目を集め、宣伝をして歩く人々のことで、映画の他にも店や商品の宣伝を行った。

東京都

昭和24年(1949)頃

ハワイ大学マノア校図書館日本研究センター提供
ウォルター A. ペニーノ撮影

S1H0702012714

33. ライフマスクの露店

日本劇場の前で、進駐軍の兵士相手に粘土で本人に似せたライフマスクを作る男性。

東京都千代田区有楽町

昭和22～27年(1947～1952)

マッカーサー記念館提供

S1H0702013968

34. 豆腐の行商人

天秤棒で担いだ木桶には水を張って豆腐を、桶の上の木箱には油揚げなど加工したものを入れていた。
ラッパを吹いたり、「トーフー」などと売り声を上げながら、街頭を売り歩くのが豆腐屋の定番であった。

東京都

昭和22～36年(1947～1961)

マッカーサー記念館提供

S1H0702013896

35. 熱海のみかん売り

旅館が建ち並ぶ海岸通りで、観光客向けに特産物のみかんを売る露店。
後方には、熱海大火(昭和25年4月13日発生)で焼失する前の旅館街が写る。

静岡県熱海市東海岸町

昭和25年(1950)3月頃

マッカーサー記念館提供

S1H2655101614

36. 堀川での友禅流し

友禅流しとは、京友禅の反物についた余分な染料や糊を洗い落とす工程のことで、京都市内では鴨川や桂川などでも行われていた。
河川の水質汚染につながるため、昭和30年以降は次第に行われなくなった。

京都府京都市

昭和25年(1950)6月

ラファイエット大学スキルマン図書館提供
ジェラルド・ワーナー & リラ・ワーナー撮影

S1H3051112477

37. 農家によるし尿の汲み取り

農家が肥桶(こえおけ)を牛車で運ぶ様子。農家は肥料としてし尿を使用していたが、昭和30年頃には化学肥料が普及し、農家による汲(く)み取りは行われなくなった。

茨城県古河市中田

昭和25年(1950)

ウィリアム・C・ヘリントン撮影

S1H0701010851

38. 地固めをする女性たち

石だこを使い路肩の地固めをする女性作業員たち。石臼状の丸石に8本の引き綱をつけ、石を上下させて土を固める作業で、この綱の数を蜻の足に見立てて「石だこ」と称した。

茨城県

昭和26年（1951）4月21日

米国国立公文書館提供

S1H2436100864

39. 手車によるごみ収集

塵芥箱（じんかいばこ）から手車へ、ごみを移す収集作業員。手車には東京都の紋章が入っている。
手車を用いた人力によるごみ収集は、昭和40年頃まで行われていた。収集されたごみはトラックや船に積み替えられ、焼却場や埋立処分場へ運搬された。

東京都

昭和26年（1951）6月頃

オーストラリア戦争記念館提供

S1H0702013496

40. 日用品を修理する職人たち

手前では木桶の修理が行われている。中央は釜を修理する職人で、鋳掛屋（いかけや）と呼ばれた。奥の方では傘を修理する様子も見える。
戦後もしばらくは物資不足が続き、あらゆる物が修理されながら長く使われた。

東京都目黒区緑が丘

昭和26年（1951）9～10月頃

マッカーサー記念館提供

S1H0702014115

41. 立ち売りの少女たち

かごに日用雑貨を並べ、道行く人に立ち売りをする少女たち。。日用雑貨のほか、野菜や果物、衣料品など、あらゆる物を円形の竹かごに入れて売り歩く光景は、「那覇名物」と言われる程であった。
当時の沖縄は米国の統治下で、「B円」と呼ばれる米軍発行のB型軍票が通貨として使用されていた。

沖縄県那覇市牧志

昭和27年頃（1952）

マッカーサー記念館提供

S1H0702014281

42. 靴磨き

北海道庁近くの通りで横一列に並ぶ靴磨きの女性たち。スーツ姿のサラリーマンが磨いてもらっている。
当時は全国的に舗装されていない道路がほとんどで、靴はすぐに砂ぼこりや泥で汚れてしまう状況であった。

北海道札幌市中央区

昭和28年頃（1953）

マッカーサー記念館提供

S1R0381127114

43. ひよこ売り

ひよこを売る男性と、物欲しそうに見る子ども。
雄のひよこは成長しても産卵しないことなどから、愛玩用として縁日や路上などで販売されていた。赤・青・緑・ピンクなどに着色した、カラーひよこが売られていることもあった。

茨城県古河市本町

昭和31年（1956）

鈴木路雄撮影

S1H2517101090

44. 蕎麦屋の出前持ち

蕎麦せいろや丼物を高く積み上げて肩にのせ、自転車で出前をする様子。
右側の建物は日本橋髙島屋。

東京都中央区日本橋

昭和31年（1956）6～7月

持田晃撮影

S1R0381127128

45. 羅宇屋

羅宇屋（らうや）とは、刻みタバコを吸うための煙管の修理や手入れをする職人のことで、道具類を収めたリヤカーを引き、街頭を流していた。紙タバコの普及と共に見られなくなった。

茨城県古河市横山町

昭和32年（1957）1月

鈴木路雄撮影

S1R0381127163

46. 踏切番（踏切警手）

自動化された踏切遮断機が登場する以前は、列車の往来に合わせて踏切番が遮断機の上げ下げを行っていた。線路脇に建てられた小屋に詰め、通行量の多い踏切では、昼夜を問わず踏切の操作に当たることもあった。

茨城県古河市本町

昭和30～32年（1955～1957）

鈴木路雄撮影